ISSN 1345-3580

Glocal Tenri

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.23 No.8 August 2022

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

8

CONTENTS

・巻頭言
「型」について④
／永尾　教昭 1

・文脈で読む「身上さとし」（2）
増野正兵衛とその「おさしづ」
／深谷　耕治 2

・伝道と翻訳―受容と変容の“はざま”で―（36）
天理教教義翻訳の諸相③
／成田　道広 3

・英語文献にみる天理教（新連載）
はじめに：天理教はどうみられてきたか？
／尾上　貴行 4

・音のちから―中国古代の人と音楽（9）
昆虫にも音楽がわかる？
／中　純子 5

・ヴァチカン便り（57）
混迷する次期法王の選出
／山口　英雄 6

・思案・試案・私案
「碍」の字表記問題再考（20）
仏教にみる障害者像
／八木　三郎 7

・2022年度公開教学講座要旨：『逸話篇』に学ぶ（8）
第1講：151「をびや許し」
／永尾　教昭 8

・2022年度公開教学講座要旨：『逸話篇』に学ぶ（8）
第2講：111「朝、起こされるのと」
／澤井　真 9

・図書紹介（131）
櫻井義秀著『東アジア宗教のかたち 比較宗教社会学への招待』（法蔵館、2022年）
／堀内　みどり 10

・おやさと研究所ニュース 11

2022年度伝道研究会／第348回研究報告会／天理参考館で記念講演／第63回印度学宗教学会学術大会で発表／日本イスラム協会で講演／第349回研究報告会／連載執筆のねらいと執筆者紹介／2022年度公開教学講座のご案内

巻頭言

「型」について④

おやさと研究所長　永尾教昭　*Noriaki Nagao*

文化でも信仰でも、特定の国や民族で始まったものが他国や他民族に伝播していくとき、意図的かどうかはともかく、必ず多少なりとも型が変わっていくと思う。アメリカで始まった野球は、日本に来て試合前に両チームで「礼」をするなど型が変わった。インドのカレーと日本のそれはやや違う。日本のバレンタインデーでは、女性が男性にチョコレートを贈る日になった。

そんな中でも、とりわけ日本人は型にこだわり重視する民族だと思う。したがって、日本発祥の文化が外国に広まっていくのにも、その国の民族性に流されて型が変わっていくのを必ずしも良しとしない。柔道でも茶道でも外面的な型を守らせ、そこに込められている精神性さえも理解させようとする。しかし、それらを外国でより一般に普及させたいと努める者は、その国の人にも入りやすいように型を変えてしまうので、本家本元から批判されることがある。実際、先日、筆者は日本の空手道関係者と面談したが、彼は「今の国際大会の空手は本来の空手ではない」と批判していた。

一方型を変えることで、その文化や信仰に親しめるようになるであろう外国人はそのことをどう捉えるのだろうか。筆者はヨーロッパで天理教の信仰を広めようと微力を尽くしたが、教えや「つとめ」と呼ばれる最高祭儀そのものは変えることはありえないが、やはり型を許容される範囲で変えようと努めた。そのような中で、思いがけないことがあった。

現在フランスにある天理教ヨーロッパ出張所の神殿参拝場は、日本式に靴を脱いで上がる。アジア諸国はともかく、アメリカ伝道庁、メキシコ出張所、コンゴブラザビル教会などは土足のままだ（上段と呼ばれる祭儀を司る場所はいずれも靴を脱ぐ）。無論、それぞれその国の文化を尊重したのだろう。

ヨーロッパ人の中には、屋内で靴を脱ぐことに違和感を感じる人も多い。筆者はある会議で、これを土足にしようと提案した。最終的には否決されたのだが、その際、強く反対意見を述べたのがヨーロッパに派遣されている日本人布教師ではなく、現地ヨーロッパ人の信仰者だったのだ。そして、その場にいた天理教海外部の役職者は「ヨーロッパ人が反対しているのをなぜ変える必要があるか」と言い、結局現行の状態に決まった。日本人布教師である筆者が、ヨーロッパ人のことを慮り、日本的な型を変えようとしたことに対して、当のヨーロッパ人が断固として反対したのだ。その構図を第三者的に見ると、実に奇妙に映るだろう。

同様に、以前も述べた「みかぐらうた」（つとめの地歌）を、歌いなおかつ踊れる（歌詞の意味と動作が合致する）ような形で各国語に翻訳することについても、彼らは反対で日本語ですべきという考え方であった。つまり、それぞれの国で天理教を熱心に信仰する現地人信者らは、先達として型という言わば壁を乗り越えてきているのである。そしてそれゆえ、その型も信仰に重要な一つの要素だと捉えている。彼らの口からよく出てくるのが「おぢば（天理教本部）が〇〇されているから…」である。天理教本部でなされている様式を、そっくりそのまま踏襲するのが真の信仰であり、我々はそれを実践してきたという自負があるのだ。

だから、安易な道に流されずに、その型のまま信仰を広めるべきだと考えるのだと思う。こうなってくると外国での信仰の伝播を目論んで型を変えようとする布教師は、出口つまり本元からも批判され、入口つまり布教地でも批判されるという微妙な立ち位置になる恐れはある。